



イギリス分科主任挨拶

齋藤兆史

早いもので、イギリス科の主任を引き継いで一年余りの歳月が過ぎた。木畑先生のご退職はとても寂しい出来事ではあったが、今年度のところは、まだ親離れのできない子供のように、先生に非常勤としてのご出講をお願いし、その力におすがりしている。また、助教の伊藤氏のご栄転に際しても、喜ぶべきことであるとは知りながら、氏があまりに有能であったために、イギリス科の運営に関して大きな不安を感じずにはいられなかった。しかしながらその寂しさと不安を吹き飛ばすかのように、木畑先生の後任として後藤春美先生が、伊藤さんの後任としてアンジェラ・ダヴェンポートさんがイギリス科のメンバーに加わってくれた。二人をお迎えできたことは、大きな喜びである。

悲喜こもごものイギリス科生活のなかで、いまだになぜ私が主任を務めているのか、

務めていていいものなのかどうかもよく分からないが、それは別として、改めて考えてみるに、イギリスは私にとってやはり一番馴染みのある外国である。中学で英語が好きになり、将来は英語の先生になりたいと思った時点で、その言語を生み出した国への関心が芽生えたのは当然とはいえ、必ずしも英語が絡まずとも、気がつくといギリスに関連したものに触れていることが多かった。大学時代には「ブリテイツ・ニュー・ハード・ロック」に凝り、バンドでデイープ・パープルやレインボーの曲を演奏したものである(私はドラム担当)。

今年の一月から三月まで、NHKの「3ヶ月トピック英会話」という番組を担当した。週一回、三ヶ月の二十分番組でできることなど限られているので、発音記号を用いた発音指導をテーマに据えた。一口に英語の発音と言ってもいろいろあるが、ここでも迷うことなくイギリスの標準発音(Received Pronunciation = RP)を選んだ。苦労したのは、NHKの番組だけに社会階級

に絡む話ができないことで、イギリス英語の特徴がうまく説明できずに歯がゆい思いをしたことも一度や二度ではない。ともあれ、イギリス英語の発音を勉強するついでにイギリス文化にも触れてもらおうと「Tea Time」なるコーナーを設け、それぞれの回のテーマとなる発音に関連する文化事象を紹介することにした。/r/と/l/の区別をテーマとする初回には上記 Hard Rock Band の Rainbow の「Long Live Rock 'n' Roll」を /s/ と /sh/ をテーマとする第2回には sheepdog trial を紹介し、そのあたりまでは調子が多かったが、次第にネタ切れとなり、後半、英文学の話をして何とか息を吹き返したが(本当に吹き返したのか?)、最後まで冷や汗をかきっぱなしの文化紹介であった。イギリスに関する不勉強を痛感した三ヶ月間であった。

一方でイギリス文化を愛し、それを多くの人に知ってもらいたいと思う反面、四半世紀も英語教師をしていると、「これからの時代、英語の規範を

作るのは自分たちではなく、それを第二言語、外国語として使う皆さんである」などとうまいことを言って、あの手この手で英語を世界中に売り込もうとするイギリスの文化戦略、言うなれば「言語文化帝国主義」が鼻についてくる。私の場合、「英語に振り回されるな」と説教をしながら英語を教えている逆説は、イギリスに対する愛憎と一直線に結びついている。憎しみが湧いてきたということ、それだけ関係が深くなったことでもあり、ここまで来てしまうと簡単に縁は切れそうにない。今後もイギリスとの愛憎相半ばする付き合いは続きそうであるが、イギリス科は（少なくとも今年度いっぱい）愛し続けようと思っている。イギリス科関係諸氏のご指導ご鞭撻を切に願う次第である。



退職のご挨拶

ーイギリス科あれこれー

木畑洋一

私は東京大学教養学部勤務を本年三月末で終え、四月から成城大学での教員生活を始めました。一九六六年秋からのイギリス科学生時代の助手時代、そして八三年春からの教員時代と、考えてみればずいぶん長い間イギリス科に直接関わってまいりました。七七年からの東京外国語大学勤務の間も、非常勤講師として教えていましたから、私の人生はイギリス科と切り離しては考えられません。この間、イギリス科が置かれた環境はずいぶん変わりました。一九七〇年代に取り壊された旧第二本館にあった研究室が第八本館（後に八号館と改称）の新築でその三階に移ったのは、私のイギリス科学生時代でした。研究室は八号館の中でも同じ三階で一度移転し、さらに今は八号館の大

改修の結果四階に移っていません。私が助手の時には、今のように学生・院生がくつろげるスペースはなく、従ってそれを運営する苦勞もありませんでした。そうした仕事を見事にこなしている近年の助手や嘱託の方々には感心するばかりです。

イギリス科の学生をとりまく状況も当然変わってきました。昔は在学中に留学するにはサンケイスカラシップという奨学金を得る位のことしか考えられませんでした（私も含め何人かのイギリス科の学生はこの奨学金で留学しています）、九十年代半ばから始まった AIKOM プログラムによつて留学できる学生の数は飛躍的に増大しました。それ以降、イギリス科の学生の三分の程度はこれで留学しているのではないのでしょうか。

また私が卒論を書いた時には、何の指導も受けず、その代わり報告会といったものもありませんでした。しかし、今では丁寧な指導がなされ、英語だけで行う中間報告会、最終報告会が開かれるよう

になっていきます。これも大きな変化といえるでしょう。

こうしたイギリス科の動向を伝える手段として、かつては『コスモス』という雑誌がありました。絶えてしまいました。一九九〇年代後半、私がイギリス科主任だった時、このニューズレターを作り始めたのは、『コスモス』に代わる情報伝達媒体にするためでした。幸いその後の主任の先生方のご努力で、ニューズレターは続いています。私もこれからは、このニューズレターを通じて変化を知りながら、外からイギリス科を応援していきたいと思っています。最後に、これまでお世話になった皆様方に改めて心から感謝いたします。



着任のご挨拶

後藤春美

今年四月、木畑洋一先生の後任として着任いたしました。後任とは言っても、木畑先生の有能さ・人徳には全く及ぶべくもありませんが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私の専門は、二〇世紀前半の国際関係史、イギリス帝国史です。イギリス科とのご縁は一九八三年に遡りますが、四半世紀前のイギリス科は圧倒的に文学の薫り高く、歴史、国際関係などに興味を持つ者は少数派だったように記憶しております。また、私は彷徨期間が長く、日英関係を中心に国際関係の歴史に勉強の焦点が定まったのは、ようやく博士課程に進学してからでした。

一九八七年から一年間、オクスフォード大学ウオダム・コレッジ、さらに一九九〇年から三年間、同じくオクスフォード大学のセント・アントニーズ・コレッジに留学し、博士号(D.Phil.)を取得しました。一

九九〇年秋からの半年間は、木畑先生のロンドンでの在外研究と重なるという幸運に恵まれ、今は The National Archives と名前を変えた Public Record Office での初日から史料の見方を教えていただきました。

博士論文では、中国の上海をめぐる一九二〇年代の日英関係を研究しました。この頃には、オクスフォード大学の先生方や木畑先生、草光俊雄先生に加え、ロンドン大学名誉教授のイアン・ニッシュ先生にもお世話になりました。先生は、言うまでもなく、日露戦争、日英同盟研究の大家です。日本人女子学生で国際関係史をやるうとする者がそれ程多くなかったせいか、とても可愛がっていただいたように感じています。

留学中は、イギリスの田園を歩き回り、PRO に向かう車の中やコレッジのコモン・ルームで学友たちといつまでもしゃべっているという生活を謳歌しました。生活のペースは中世がよみがえったかと思うほどゆつたりとしていて、今で

も私の人生の中で最も幸福な一時であったと思います。その後、私の研究関心は日英関係から少し広がり、現在は、両大戦間期におけるアヘンの取り締まり、社会人道面における国際秩序形成といったことを勉強しております。

これまでの職場であった千葉大学、明治大学では国際関係史を教えたり、留学生の相手をしたりしてきました。英語を教えるのは、十五年ほど前に駒場で非常勤講師を一年間務めさせていただいて以来です。DVD など機器の操作が不得意で、四苦八苦ししているのが現状です。

このように私の専門、教育経験ともイギリス科の本流からは外れておりますが、皆様から新しい刺激を受けつつ何とか努めて参りたいと考えております。どうぞよろしくご指導ご鞭撻いただけますようお願い申し上げます。



新教務補佐からのご挨拶

アンジエラ・

ダヴェンポート

二〇〇九年四月から教務補佐員に就任いたしましたアンジエラ・菊枝・ダヴェンポートと申します。私はもともと本郷の英文科(院)出身で、イギリス科とは全くご縁がなかったのですが、昨年度たまたま駒場の英語でイギリス文化を英語で紹介する授業をしていたことから、このようなご縁に恵まれました。

私は英国人を父に持ち、イングラントに合計約七年滞在しておりましたので(幼少期からの「帰省」、学部時代のロンドン大学留学、そしてオックスフォード大学修士課程と博士課程留学)、私の知るイギリスの魅力や最大限皆さまにお伝えできればと考えております。また、イギリス科で日英の懸け橋となる機会に恵まれたことを心から嬉しく思っております。私は学部時代からシェイクスピア研究を続けてまいりました。博士論文では、*Prostitution in Shakespeare* と

いうタイトルのもと、特に『終わりよければ全てよし』、『尺には尺を』、『オセロ』、『ペリクリーズ』という4つの劇作品で売春と性統治のテーマがどのようなに表象されているのかという論点から議論を展開していきます。興味深いことに当時のロンドンの法廷記録や関連資料を分析していくうちに、性統治が厳しくなっていたという事実が明らかになりました(オックスフォードの修士課程で当時のアルファベットと筆記体を読む訓練を受けたお陰で何とか手書きの法廷記録を読むことができるようになりましたが、慣れるまでは一時間にやっと十行読めるか読めないか、という気長な作業でした)。シェイクスピアの上記の劇の中では、しかし、性を統治する側の人間の性の腐敗が暴露されたり、制度としての性統制の欠点・問題点が執拗に追及されたりしていることがわかります。この研究のために、ロンドンやロンドン郊外のアーカイブで法廷記録を読み漁ったり、当時活躍していた治安判事の子孫にあたる人と連絡を取って情報を交換したりしことが今でも良

い思い出として残っています。私は学生生活が長かったので、学生さんへの学問的なアドヴァイスだけではなく、研究生活をしていく上で大切なモラル・サポートもしていきたいと考えています。しかし、今は教務補佐の仕事と並行して授業を週五コマ教えていることもあり、むしろイギリス科の先生方や研究室にいる心優しい学生達に私の方が助けられながら新しい仕事を何とかこなしていつかいるという心もとない状態です。それでも、伺っていた通り仲の良いアットホームなイギリス科。素敵な職場で働くことができて何と幸せなのだろうと思いはじめています。何卒よろしくお願いたします。



東京大学図書館所蔵

オンラインデータベース紹介

Oxford Dictionary of National Biography (Online)
オックスフォード英国人名辞典

(DNB)のオンライン版です。収録人数約五万七千人(英国籍の人物だけではなく、英国の歴史と文化に深く関与した人も収録)。およそ3万2千の肖像画像(ナショナル・ポートレート・ギャラリー所蔵)にリンクされています。

Early English Books Online (EEBO)

一四七五年〜一七〇〇年の間に英国で出版された書籍をデジタル化して提供する、初期英語書籍集成データベースです。英文学だけでなく、宗教、歴史、政治、経済、社会、科学、芸術、言語学など、西欧の様々な学問分野に携わる研究者に、多彩で専門的な文献資料を提供しています。

Eighteenth Century Collections Online (ECCO)

一七〇一〜一八〇〇年中に刊行された約十五万点、三千三百万ページの完本・印刷物を収録しています。イギリス、及びイギリスの植民地で刊行された印刷物に関しては言語を問わず収録。それ以外の地域で刊行されたもの場合は、英語テキストのみを収録。書籍だけでなく、パンフレット、手引書、年間、地図、カレンダー、法令など、あらゆる形態の印刷物を含んでいます。全収録資料のフルテキスト検索が可能です。

JSTOR

人文科学、社会科学を中心とする代表的な学術雑誌のバックナンバーを集積したデータベースです。

その他 OED をはじめとした辞書類、学術論文の検索に欠かせない MLA International Bibliography や Project Muse などもあります。論文執筆中の方々は、是非ご利用ください。(その他のデータベースを探すには、東京大学図書館のホームページの「データベースを探す (GACoS)」をクリックすると東京大学で利用できる自分の目的にあったデータベースを検索することができます。)(注:データベースの説明は、過去の図書館ニュースから引用しています)。

二〇〇九年度

イギリス科運営委員

斎藤兆史(主任)、アルヴィ宮本なほ子(副主任)、後藤春美、小林宜子、鈴木英夫、中尾まさみ、西川杉子、山本史郎、Brendan Wilson, (Paul Rossier), アンジェラ・ダヴェンポルト(教務補佐)。

ホームカミングデー／同窓会のお知らせ

ホームカミングデーと同窓会が2009年11月14日(土)に開催されます。木畑洋一先生の講演会を予定しております。詳細は追ってお知らせいたします。

